

1975年2月28日第3種郵便物認可 1992年12月15日発行
毎月1回15日発行
定価/150円
年間購読料/2,000円
(送料共)

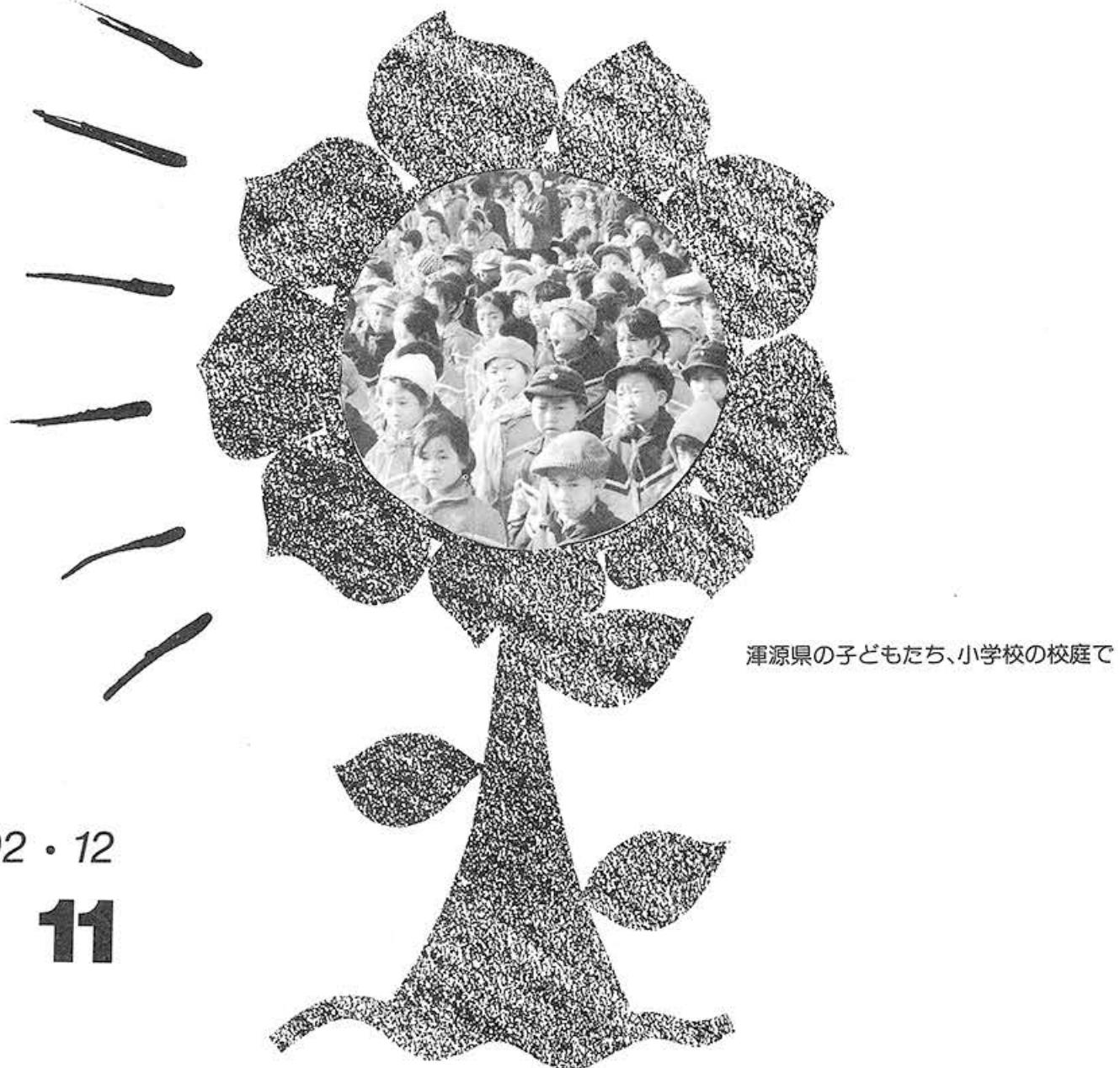
編集/緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739(番552)
郵便振替 大阪 4-128465
COM21 通巻305号 発行/COM企画室

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- 山西省雁北地区レポート…………P 2~4
- 環境NGOが元気になる話…………P 5~6



渾源県の子どもたち、小学校の校庭で

1992・12

11

黄土高原のナウシカたち

40日間の滞在を終えて

高見邦雄 (GEN世話人)

黄土高原の厳しい自然

山西省雁北地区に、9月末から11月はじめまで40日ほど滞在して、つよく感じたのは自然環境と村の生活の厳しさです。

日本では、手入れされない山道はすぐ草や木におおわれてしまします。アスファルトの舗装さえ、木や竹の生命力は打ち破ってしまいます。

しかし今日の黄土高原では、わずかな灌木を除いて、自然に樹木が生えてくることはまずありません。一本の木もない山がえんえんとつづいていますし、もし木があるとすれば、それはかなり最近に、人びとが植えたものだと思ってまちがいないのです。

前号で「小老樹」について報告しましたが、私は最初それを人間の植えたボプラだとは思いもしませんでした。そういう種類の灌木が、自然に生えているとみていたのです。

10月25日、北岳恒山に登りました。五岳のひとつとして人びとにあがめられたこの山は、例外的に緑が保存されてきました。樹齢1000年前後といわれる松の古木が残っており、この30年ほども熱心な植樹がすすめられてきました。ところが「北面は順調にすすんだ



恒山の山頂のコントラスト。左手の北面は樹木が茂っているのに、右手の南面は木が育たない。

が、南面は困難だ」というのです。

微妙なバランスのうえに

山頂に立って、そのコントラストにびっくりしました。左手の北面には杜松、雲杉、カラ松、白樺などのほか、背丈くらいの灌木がびっしり茂っているのに（なかには黄や赤の実をつけたものもあります）、稜線の踏み分け道を境に、右手の南面には一本の木もないのです。

日本に帰って写真をみせながらその話をすると、みんなぶかしげな顔をします。陽のあたる南面がよく伸び、北側は育ちにくいうのが私たちの常識だからです。

北緯40度、標高2017m、年間降水量

400ミリ前後の山頂付近が、森林限界に近いのはたしかでしょう。そこに「陽があたり、乾燥する」という条件が加わったとき、北面で成育可能な樹木も、南面では育たなくなってしまうのです。

写真ではわかりにくいのですが、南面にも1~1.5m間隔で溝が切られ、植樹のあとがありました。植えたけれども、育たなかったのです。頂

上から100mほど下ると、黄色い実をびっしりとつけたサージ（沙棘）がかなりの面積にわたってブッシュをつくりており、近づくと小鳥が飛びたちました。溝が切ってあったからこそ、サージの実は雨に流されないでそこに根づくことができたのです。

小鳥を呼べる多様な森を

サージのことをもう少し書きます。せいぜい1mの小灌木ですが、ヤギの放牧地でも平気でブッシュをつくるの



苗木27万本が黄土の大地に

会員はじめ多くのみなさんの協力で渾源県に贈った1992年緑化協力資金（連絡費用を除く225万円）は、約27万本の苗木となって、合計95ヘクタールの大地に根づいています。うちわけは以下のとおりです。

A. 西留郷の中日友好交流青年友誼林
・樟子松の小苗（単価2.5円）20万本
・仁用杏の苗（単価37.5円）2万本
植林面積は85ヘクタール

B. 北岳・恒山の地球環境林
・油松の大苗（単価750円）660本
・樟子松の苗（単価12円）4万9500本
植林面積は10ヘクタール

現在時点での活着率は、地元の人たちの入念な手入れの結果、どちらも85~90%に達しています。

緑の地球ネットワーク結成記念の集い

●とき／1993年4月11日(日)正午より
●ところ／大阪市内

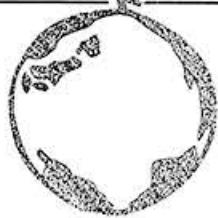
1. 結成記念会員の集い
……12時～1時

2. 矢吹紫帆応援演奏会
シンセサイザー演奏・環境音楽
……1時～2時

3. 結成記念シンポジウム ……2時～5時
「アジアの森林再生と民間協力」(仮称)

パネリスト
梶田 効さん(京都精華大学教員)
深尾葉子さん(大阪外大教員)

石田紀郎さん(京都大学教員)
稻村昭南さん(アジア自然塾塾頭)



は鋭いトゲがあるからです。日本の秋グミをオレンジ色にしたような実は、もっとすっぽく、枝つきのものが街角で売られ、ジュースもあります。根に根粒菌をもち、土を肥やす効果があり土留めにはもってこい。このような木がふえて小鳥を呼びよせると、自然の力で緑化のすすむ可能性がでてくるので、注目に値します。

ちょっと横道にそれましたが、「小老樹」や恒山の「南面と北面」のことを書いたのは、黄土高原の緑化が厳しい自然条件の微妙なバランスのうえになりたっていること、人間の懸命の努力があってはじめて環境は修復できること、私たちにとっても協力のしがいのある、夢のある事業だということをいいたかったのです。

悠然と生きる村の人びと

渾源県の一人あたり年収は約400元（1元は約22円）、郷单位では180元から850元くらいまであり、500元をこえるのは石炭のとれるところです。村にいくと、人びとの生活のあり方を

きめる条件は、収入以外にたくさんあります。

その最たるものは水で、村に水があるとそれだけで生活に余裕がでてきますが、丘陵地の村にはたいてい井戸がありません。谷底の井戸まで往復1.5～2キロの坂道を天秤棒をかついで通うのは、たいへんな重労働です。

トウモロコシやコーリャンがとれるとかなり豊かなのですが、これも平地



黄土高原のナウシカたち。この子たちの未来のために、人びとは木を植えはじめた。

温増玉さんからの手紙



日本緑の地球ネットワーク（準）のみなさんへ

こんにちは。みなさんお元気で、仕事も順調であることをお祈りしていま

す。

私たちは、皆さんの1992年度の渾源県の緑化事業に対する援助と支持にたいへん感謝しています。渾源県との協力に感謝しています。今後、接触を多く保ち、相互理解をより深め、地球緑化の共同事業をより強化し、生態環境を改善し、人類の幸福を造りだす偉大な事業をあくまでやりとおすことを切望しています。

私たちは皆さんがはるか万里を超えて渾源県にやって来て、自ら植樹造林活動に参加されることに大変敬服し、私心なく渾源県の緑化のために9万元の支援をされたことに、心より感謝します。

今後の協力に関しては、直接に私たちと連絡をとり、過去の実績を踏まえて、新しい事業の展開を積極的に取り

にかぎられ、丘陵地ではアワ、キビ、マメ、ジャガイモぐらいのものです。

霜のない期間が100日しかない県南部の山区はもっと困難ですが、どこの村にいっても、安っぽい同情をするのが恥ずかしくなるくらい、人びとは誇り高く、悠然と生きてています。厳しい環境で生きるための相互の関係の豊かさもなかなか魅力的に思えます。

【次頁につづく】

組んでいきましょう。渾源の緑化事業を新しい段階に移行させるよう互いに努力しましょう。

友人の皆さん、私たちの事業は現在に利益をもたらし、万代にわたって幸福を造り出す偉大な事業です。このプロジェクトに、日本の友人の皆さん、私たちとの協力を続けていただけるのならば、政策の面でも優遇の措置をとりたいと思います。具体的には今後面談の上相談しましょう。

すべての会員の皆さん方が万事順調でありますように。

さようなら。

渾源県林業局長 温増玉

1992.10.22



黄土高原のナウシカたち

「こここの家は犬がいるから気をつけて！」——手をつないで村を案内してくれるこどもたちも、ほんとうに愛らしく、誇り高いのです。私はなんども「黄土高原は風の谷のナウシカの世界だ」という深尾葉子さんのことばを思い出しました。

雲崗の石窟をはじめ、大同には北魏のみやこであった時代の遺跡がたくさんあり、周辺の雁北地区にも同時代の遺跡がちらばっています。この一帯が文明の波にあらわれたのはもっと早く、渾源でも2500年以上まえの春秋戦国時代の青銅器が発掘され、漢代の古墳が数多くあります（滞在中、盗掘事件を耳にしました）。

その当時、たくさんの樹木があった

ことは、山西省に中国でいちばん多く木造の寺院などが残されていることでもわかります。豊かな自然がなければ、農業生産を基礎にした大文明が育つわけがないのです。

その文明が環境の大破壊をまねき、それから1500年あとの世界に人びとはくらしているのです。「風の谷」でも人びとは汚染を避けて谷底の井戸水で生活しました。「腐海」は押し寄せてくる黄色い「砂」だと、深尾さんはいました。ここは、後れた過去の世界ではなく、私たちの未来の世界だ、そう考えると、この緑化協力の意味もいっそう深まります。

日中戦争で4300人の犠牲者

日中戦争のさい、日本軍は渾源県の中心部を占領しました。恒山の一帯は

内蒙古南部から山西省・河北省にかけての戦略中枢であり、激しい争奪の対象になりました。1937年秋から45年夏にかけての40回の戦闘と虐殺事件による犠牲者は4300人以上になります。

森林消防のジープに乗せてもらい、吹雪のなかを山深くはいっていくと、「え、こんなところにも！」と驚くようなところに村があります。そんな村のいくつかで虐殺事件があり、なかには村ごとなくなつたところもあります。比較的豊かな平地の村を日本軍が押さえ、中国の抗日遊撃隊が山の奥深くで頑強に抵抗したからです。

そういう村は、いまでも困難な立地条件にあります。私たちの緑の協力をそのような村まで届けることはできないものか。それもこれからの私たちの課題だと思います。（つづく）

山西省の自然

石原忠一
(第一次緑化協力団団長)

⑤ポプラ(楊樹)

山西省の代表的な植物を数えると、
Populus hopeiensis



ヤオトンをとり囲むポプラ

河北楊をあげなければなりません。通称ポプラと呼ぶ属を中国語では楊（木偏に揚げると書いて、幹や枝が天に向かって伸びあがっているさまをよく表しています）と呼び、雌雄異株で、5月のよく晴れた日には、白い綿毛のついた種子を風に飛ばします（柳絮・りゅうじょ）。

楊柳（YAN LIU）とまとめてよぶのが日本語のヤナギの語源と考えられます。

建国後、毛沢東の指導のもとで、この楊樹が鉄道や道路や農地の水路にそつて精力的に植えられました。

枝を挿木すると、よく活着しますので苗が得やすく、成長のとても早い木です。若葉や小枝は家畜の餌になり、落葉や枯枝は燃料になります。日かけ

をつくって夏の暑さをやわらげ、いちばんてつと早い緑化の役割をはたしました。

柳は虫媒花ですが、楊は風媒花です。種間雑種ができやすく、品種改良もすすみ、黄土地帯の降雨量の少いアルカリ性の土質にも適した品種がつくれようとしています。

もともと太陽のよくあたる裸の地に緑をつくる先駆的な植物として、北半球の間氷河期の氷河の後退したところへ広がってゆきながら種を分化させてきた植物ですから、まず楊樹が緑の木陰をひろげ、その樹下に黒々とした土壤が発達し、さまざまな植物群が永続的に定着してゆくことに希望を托したいものです。

皆さんのお近くのポプラの樹の下にたって梢をみあげてごらんなさい。あの小さな冬芽の中に、氷河期以来の歴史を秘めて、きびしい寒さと乾燥の中で来年の生命をつついで耐えていま

緑の地球ネットワーク準備会の活動も1年がたち、初步的ではあれ多くの成果を達成することができました。来年4月には結成集会をもち、正式に発足します。結成準備と来年度の国際緑化協力のため、みなさんの年末カンパへのご協力をお願いします。

1992年12月

緑の地球ネットワーク準備会

年末カンパ
のお願い

環境NGOが元気になる話

(財)緑の地球防衛基金事務局長 柳田耕一



環境NGOの役割は世界的にますます重要になってきています。

以下は、GEN講演会での柳田さんの発言要旨です。（文責は事務局）

これは私たちが作ったポスターですが、原画はアメリカの芸術家がNASAの宇宙情報をもって描いたものです。これをみると、一目瞭然ですね。濃い緑はここアマゾンにしかありませんし、ロシアのツンドラ地帯がとけはじめているというのはここです。この一枚の絵を見ても地球環境の問題は国境からみては絶対ダメだということや南北問題が環境に大きなストレスをかけていることがわかります。

グローバリズムとNGO

今までの日本の運動は国内に影響力を持ち、国内でなにかをやろうとする原理で動いてきたわけです。ところがこういった市民運動と違ってNGOは、初めから国境を超えた運動というのが折り込まれているんですね。

グローバル、地球サイズでということが言われています。一つの国だけで政策を決定できる事もありますが、大きなところは各国が共同で政策を決定せざるを得ないところにきています。そういうことを最も突きつけているのが環境問題です。

オゾン問題では、白人ほど大きな被害があるからなんですが、環境問題では退行的なアメリカがいち早くオゾン層保護を世界的な問題にしてきました。それから、CO₂について、一番本気で進めようとしているのはヨーロッパです。森林の8割が酸性雨の影響を受けているわけで本当に深刻です。しかし、ヨーロッパだけが対策のコストをかければ産業の競争力がなくなってしまいます。だから、どうしても世界と一緒にやらない限りダメなんですね。

ヨーロッパ・アメリカのNGO

EC諸国は小さな国が多いんですね、デンマークが530万人、ルクセンブルグは17万人です。かれらは自分たちの政府だけで世界の政治に影響力を与えようとしてもダメなわけで、だから政府とはちがったセクターを作って

世界に影響力を与えたいということで、政府がお金を出してNGOを育てています。

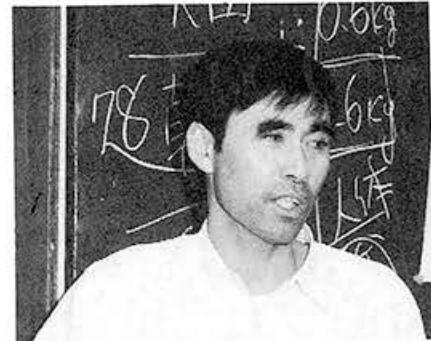
アメリカでクリントンが大統領になり、副大統領にアル・ゴアという人がなりました。このアル・ゴアが副所長をしているWRRI（世界資源研究所）という有名な研究所があります。アメリカには有名な環境シンクタンクが二つあります。1970年代にできたのがワールド・ウォッチです。そのあと80年代になってWRRIができます。今、ワールド・ウォッチは世界の環境データのベースをつくっていますし、WRRIは具体的な政策を提案しています。

ブラジルのアースサミットでUNCEDの事務局長をしたモーリス・ストロングはWRRIの理事の一人なんです。一方でこういう人たちがNGOのメンバーであり、一方では政府関係のポストも持っているわけです。ですから、これは政府で、これは国連で動かしたほうがいいとかという作戦会議は最初にWRRIの役員室でなされているわけです。あの地球サミットでも国連の事務局が考えついたんじゃなくて、WRRIが戦略を作っているんです。

世界に必要とされるNGO

欧米のNGOと日本のとは規模ややり方が本当に違います。しかし、そんなことはできないと思う必要は全然ない。遅れているだけで、かならずそういう時代が追い風でやってくると思います。どうしてかというと、国連自体が制度疲労でその有効性が急速に低下しています。地球全体をよくマネジメントするために国連に代わる新しいものが必要とされているわけです。

国民国家を形成して、社会を近代化していくというのがこの100年のシステムだったわけですが、次の100年を考えた場合、なにが社会をリードして新しい原理原則をつくっていくかと考えた時に、NGOというのは非常に大きな可能性を持っており、世界的に必



要とされているわけです。

そして、NGOは小さな国になるほど相対的に大きな力を発揮します。たとえば、私たちが応援しているタンザニアにNGOが最近できました。それはタンザニア植林協会というんですが、お金がなく出版をすることもできないわけです。今年から年間約120万円応援することになりました。タンザニアというのは国連認定の世界に28ある最貧国の一つで、一人当たりのGDPは1988年で160ドル、政府の年間予算は約2000億円しかありません。そうすると、うまく活動を展開すれば政府がやっている環境プロジェクトと同じくらいのことができるわけです。

つながることの重要さ

つながっていくことがとっても大事なんです。世界とつながることによって、南北問題の実際がどうなっているか、世界の人たちがどういう新しい原理をつくろうとしているかが分かるんです。

例えば、私が去年ヨーロッパのNGOの集まりに行ってびっくりしたことがありました。会議で決議する時に、男女どっちかの性が4割以上いない会議での決議は無効なんですね。それから有色人種の人が4割以上いない決議も無効なんです。それはまだNGOだけの原理なんですが、それをもっと広い原理にしていこうとしています。それから、タバコの問題ですが、タバコのない21世紀を作ろうと、世界中でいろんな動きがあります。例えば、イギリスでは未成年者にタバコを売った場合、罰金250万円です。オランダだと

【次頁につづく】

タバコは 700円もします。

WHOは20年前に自動販売機でタバコを売るなと勧告しています。O E C Dに参加している国で守っていないのは日本くらいです。健康のために吸い過ぎには注意しましょうとは言うが、売り過ぎに注意しましょうとは言わない。売るのはドンドン売ってくださいというわけです。こういう産業政策をとって結果的には国民が健康を害し地球の環境にストレスをかけるということになるわけです。このことは、日本でN G Oが弱いということと非常に関係があるわけです。世界とつながらなければ、私たちは世界の環境運動とか、人権問題から突出したまでは、世界と一緒に生きていくということができないんですよね。だから、日本のN G Oが果たしていく役割は大きいと思うんです。

先進国の良識

紙の使用量を例にとると、タンザニアでは、国民の年間一人当たりの使用量は 0.6 k g で、日本人の使用量は 2.26 k g です。どれだけ環境にストレスをかけているかを紙で考えるなら、日本はタンザニアの 300倍かけていることになるわけです。日本の人口は紙使用人口という概念で考えれば、360億人という途方もない数になります。普通は人口というと人体で考えますが、先進国ではライフスタイルというふうに考えないとダメなんです。エネルギーの使用量から地球環境問題を考えると、「北」は生活の質で考えないとダメなんですね。

地球の危機を救える力、可能性をどこが一番持っているかというと、私は明確に先進国の良識だと思います。一番環境の厳しい所の人たちが一番条件がありません。アフリカの識字率の平均は25%です、知らせようと思っても読めないわけです。それに新聞を印刷するお金もそれを買って読むお金もありません。一番危険な所の人たちは自分たちの命を守るために精一杯です。その時に一番可能性を持っている私たちが一方で一番環境にストレスをかけているわけです。ですから問題意識をもって自分たちのライフスタイルを変え、そして世界とつながっていこうと

いうことが本当にワーッとすごい勢いで起こっていかない限りどこにも地球を救う方法はないんです。

時間はあまりない

皮肉な言い方をすれば、人類が滅亡すれば地球環境は良くなるとも言えますが、それは論外の話ですから、私たち生きのびていこうと思うならやるしかないわけです。しかし、そんなに時間的に余裕があるわけではないんです。今年になって南極の昭和基地のオゾン層の厚さが遂にゼロになってしまったんですが、それはシミュレーションの最悪の状態よりも悪いんです。しかも、今まで使ってきたフロンの10分の1ぐらいしか上空に達していません。最近ではアルゼンチンで盲目の羊が現れ始めて大きな問題になっています。ところが、羊より弱い植物とか、プランクトンとか色々あるわけです。今年は日本でカエルの発生が異常に減少したという報告がされています。弱いところからどんどん起こってくるわけですね。

さっきのポスターにこの10年が地球の未来を決定すると書いています。これは、2年前の京都での地球再創造会議の時にフリッチョフ・カブラという地球物理学者が熱心に言ったことです。10年たったらどうなるか、そしてそのときにはたして余裕があるかということになります。それと、人間は精神的動物ですから、本当に限界まできたときには、逆にあきらめるんですね。笑って死のうよというような具合になりますよね。私たちはまだ笑えますけれども、すでにアフリカやアジアでは年間1500万人前後の子どもたちが死んでいるという状態がきているわけです。

危機は南北で進行している

最近のアトピー性皮膚炎の赤ちゃんは群馬医大の研究だと95%だといいます。だから、若いおかあさんたちがアトピー性皮膚炎を持っていない子どもを見て、病気ではないかと医者に言う。ツルツル症候群と言うんだそうです。

南と北が両方危機で、危機の形が違うだけなんです。公衆衛生学の専門家の話を聞くと 100万人に 1 人何か出で

きた時は、次の30年には 1 千人になり、次の30年には 1 万人になって、それで止められなかつたらもうアウトだというのが常識だそうです。1 年間に何千種類もの新しい化学薬品をつくっているわけですから、人体実験の途上にあるわけです。先進国も本当に危ないところにあるわけです。

元気でなければならないN G O

政府も動きだしたといわれますが、ポーズをとっているだけです。防衛庁の年間予算は 4 兆 6 千億円ですが、環境庁の予算はたった 5 百億円で、職員の数はたった 983 人です。ですから、私たち環境N G Oが頑張ると日本の環境政策に対しての影響力も大きいということなんです。そのためには、私たちが市民の権利・義務としてもっと調べて、提案して、告発して、いろんなことをやらなければいけないんですね。

「N G Oが元気になる話」が今日のテーマですが、N G O以外にほかにやってくれる所があるかというと、ないんですよ。ジャーナリズムを当てにできない証明は夕刊の問題です。新聞社は地球環境の危機を認識しなさいと言っているわけですが、だったら夕刊を止めなさいと私たちは言っているんです。毎日夕刊だけで 2200 万部出しているんです。どれだけの資源を使い、どれだけ環境を汚染していますか。さっき現在の危機を救うのは先進国の良識だと言いましたが、学校教育やジャーナリズムをあてにはできません。だから、新しい認識主体であり、いろんなことを提案し、調査し、ネットワークを組んでやっていく、そういった実践主体がどうしても生まれてこなければだめなんです。

従来日本社会にあった、労働組合や政党あるいは宗教団体にたよることもできません。しかし、世界とつながって、世界の新しい動きを知り、しかも現場をもっているN G Oは、かれらに提案して一緒にやっていくこともできるわけです。N G Oの可能性はとっても大きく、自信をもって行動すれば、ある局面では、ある地域では、私たちははるかに行政機能以上の仕事をすることができます。



関久子さんに聞く

関久子さんは1901年生まれ。教育にたずさわりながら、さまざまな社会活動の第一線で活躍。GENの緑化基金にも大きな援助をいただきました。



私は子どもの時から歌を詠んでいますが、そのせいか、常に自然を大切にしたいという思いがありました。後に、教師になってからさらに多くの問題に面するようになりました。

教師として小学校に勤めていた頃、権威主義というものに対し反感をいだき始めましたが、何百年にもわたり私たち日本人の頭にしみ込んでいるその権威でしか、教育ができない社会を何

とかしたいというのが最初でした。私の場合、何かに対して納得のゆかない感情が、判断を通して、活動のエネルギーとなります。

今まで、教育、宗教、民族、環境など、多くの問題を考えてきましたが、やはり日本人は問題を哲学的に見るのが苦手みたいなので、まだもう一步踏み込みが足りないように思えます。しかも、他国と比べた場合民衆の力というのも弱く、その力も育ちにくい状況に、日本人はおかれているようです。

ですから、民間の活動に関しては、まずめいめい個人が、多少勝手な方法でも、自分から問題に積極的に関与し、それを続けることが重要だと私は考えています。百年近く生きてきた今でも、呼吸するだけの毎日ではなく、自活を続けてゆきたいし、例えばGENの植林ツアーなどにも実際に参加し、私が命を終えた後も、私に代わって地球に生き続けてくれる木々を植えてみたかったのですが……。

幸い、GENにも、問題意識を持った若い方がいるようなので、これから日本を支える彼らに期待します。「共生」という観念でもって、よりよい世界がつくられることが、今一番の私の願いもあります。

インタビュー／東川貴子・加茂わか
な 文章作成／加茂わかかな

絵はがきに思いたくして

山下たか子(幼稚園園長)

私が小学生の頃からずっと戦争は続いている、就職したのは敗戦の翌年でした。「アジアに新しい世界をつくり出すための戦争」なのだと教えられ「八紘一宇」とか大東亜新秩序とかほんとうに何十枚習字の練習をしたことでしょう。正義のいくさを戦っている兵隊さんと、慰問文や慰問袋を送ったのは、私が小学校3年生か4年生の時だったと思います。教えられることを信じて習字をした私、教えられることを信じて戦いの場に臨んだ人々。中国の大陸で虐殺をした同時代を生きた人間として心痛む思います。

絵はがきの一枚一枚を手にとると、この国での15年戦争がと思い返され胸が痛みます。しかし『樟子松！ 黄土高原に緑を復活する新しい主役』のみずみずしいのちの輝きの絵はがきに出会って希望がわいて来ます。この絵はがきは1枚1枚ばらにしないでセットのまま同じ願につながる人に、そしてまた同じ願につながりたい人に心をこめて届けたいと思います。

新しい世紀をつくりだす一人として、中国の黄土にもそして生きているこの場にもたゆみなく木を植えつけたいと思います。

「黄土高原に緑を！」パネル展ひきつづき各所で

パネル展示は引き続き行われており、11月20日～23日は関学大の文化祭に、国際問題研究部の協力で展示しました。12月1日からはピースおおさかでの展示が始まっており、連日小学生から大人まで大勢の人々が会場を訪れ、緑化基金へのカンパもたくさん集まり絵はがきも100部以上売っています。



会期を延長して12月20日まで。ピースおおさか

す。会場のご好意で12月20日まで延長されますので今からでもぜひ足をはこんでください。

【今後の予定】

●1994年1月9日～29日
大阪市立北市民教養ルーム

●2月1日～
奈良県五条市電話局

学園祭で最優秀賞

11月19、20日と私の通っている大阪外語専門学校で学園祭が行われ、私のクラスではタコ焼き屋をし、それで得た利益を緑の地球ネットワークに募金することを目標に精一杯がんばりました。

「タコ焼き食べて世界を救おう」と

いうテーマを掲げ、けっしてかたくるしくない感じにもっていきました。GENのパネル展示もかねて、みんなに少しでも地球の環境問題を認識してもらおうというのがそもそものねらいでした。興味を示す学生は、必ずしも多いとはいえませんが、今回をきっかけに木のありがたさを知ったという学生やネパール・中国の自然環境の深刻な現状を見て驚いたという先生などさまざまな見方で感じてくれました。最終的に私たちのクラスは、内容と結果が充実しているということでクラス発表部門で最優秀賞に選ばれました。

これにとどまらず身近なところからIDEA出してGENの会員としてコツコツと活動していきたいと思っています。

(北野恵美)

君よ知るや、南の森 サラワクの原生林を視察して

石原忠一(自然と緑を守る大阪府民会議議長)

山国の中では、高山に登ると、亜寒帯や極北の植生を想像することができる景観を直接体験することができます。しかし、南の植生は、国境を越えて南へ旅行しなければ見ることができません。

奄美大島が米軍政府から返された翌夏、1954年ハブの恐怖におののきながら、モダマやソテツやクロツグの生えている亜熱帯の植生や、マングローブをしらべに行って、大きな感動をおぼえました。それから沖縄とのおつきあいがつづきました。南にゆくほど生物種が豊富になるのです。

今年6月、リオで「環境と開発の国連会議」がもたらし、熱帯雨林の種の多様性の保全が重大問題となり、すでに東南アジアの熱帯林の材木を大量に輸入し、はげしく浪費している日本の責任が問われてきました。

私たちは、熱帯雨林についてあまりにも知識が不足しています。ジャングルと言う英語は18世紀末、インドの原住民の間で使われていた「荒れた土地」を意味することばでした。南洋の密林も、いちども熱帯にいったことのない、E・パローズ原作の1912年からのターザンのシリーズの映画からうける不思議な生物たちの支配している暑い森のイメージの域を出ない生態学的な基礎の弱いものでした。

一方日本の林業は、南洋材の圧力にまけて生産コストが割高であり、林業労働者の激減によって間伐すらできず、放置と荒廃という深刻な状況に追いこまれています。

日本の森林も、熱帯雨林の生物種も貴重であって、持続可能な開発の道をみつけねばなりません。「自然と緑を守る大阪府民会議」は、8人の代表団



川の両岸に延々と積み上げられた原木を直接マレーシア、サラワク州の熱帯雨林の視察に10月21日から9日間送ることになりました。

そこには、落葉をすかさず根が食うさまじい再生産機能をもった60mをこす巨大な原生林が、いまだ知られていない多様な種をかかえて、赤道直下、世界第3番目の島ボルネオ島を足場に生き残っているのを見ました。

そして、筏や舟ではこぼれて、下流の両岸に、累々延々と積み上げられている、伐採された木材をまのあたりにしてきました。

今、映像とフィールド・ノートの整理・報告書づくりに追われています。

ロゴタイプ シンボルマークを募集!

GENもいよいよ来年4月に正式発足します。つきましてはGENのロゴタイプとシンボルマークをつくりたいと思いますので、皆さんの作品をお待ちしております。

- 応募期限1993年3月31日まで
- 形式は自由ですが、A4版以内程度で。
- ☆皆さんのアイデアをどんどんお寄せください。

黄土高原に緑を！絵はがき

販売にご協力を！

★1セット6枚入り 300円(送料別途)
(10部以上の場合 250円)

★販売収益は苗木代になります。
1セットでカラマツ苗 100本が送れます。

第4回自然と親しむ会

- とき／1993年1月24日(日)
午前9時20分集合 9時30分出発
阪急宝塚線「池田」駅・幸福銀行前集合
- 目的地／大阪府立総合青少年野外活動センター
里山での柴刈りを体験します。
- 参加費／大人 700円、子ども 500円
(入園料・保険料含む)

緑化基金として 中国製物品購入のお願い！

- 布製セカンドバッグ
大 15×25センチ 赤と茶2色 600円
小 12×14センチ 赤のみ 500円
素朴ですが値の割りにはよいものです。
- 木製本漆箱 31×16×8センチ 3900円
※得る商社から現物カンバとしていただいたもの
です。みなさんのご協力をよろしく！

編集後記

- みなさん、ボーナスで苗木を買いましょう。(東川)
- “イメージは全て実現できる”という言葉と“成さぬ事の美しさ”という

二つの言葉があります。一見相反する考え方のようですが、どちらか一方をかけては物事の成り立ちはむずかしく、妙にチグハグになるだろう、と聞きました。誰がいった事かは忘れましたが、なかなかのものだなあと感心させ

られました。(波田地浩志)
●『緑の地球』の今年最後の編集作業もようやく終わって一息つけそうです。急に寒くなってしまった、お身体に気をつけてください。それでは皆さん良い年を！(林)